

震災から15年

支え合い 助け合い 笑顔あふれるまちへ



東日本大震災の発生から15年目を迎えた令和8年3月11日(水)、奇跡の一本松ホールで追悼式が執り行われました。

平成23年の震災では、本市において1560人が犠牲となり、今なお201人の行方が分かっていません。式典には遺族や来賓など約190人が参列し、震災発生時刻の午後2時46分に合わせて黙祷を捧げました。

追悼式で佐々木市長は「東日本大震災から15年の歳月が流れました。幾年の歳月を経ても、最愛の家族を突然失われた遺族の皆様への深い悲しみが、癒えることは決してありません。志半ばで犠牲となられた方々を思い、また、最愛の家族や親族、友人を失われた方々のお気持ちに思いを致すとき、今なお哀惜の念に

堪えません。震災から15年が経過し、国の第2期復興・創生期間が終了し、復興事業は、心のケアや地域コミュニティへの支援などを中心とした、新たな段階を迎えることとなります。復興に関する国の制度が変わりましても、市民の皆様が誰一人として、取り残すことのないよう、今後も真の復興に向け取り組んでまいります」と式辞を述べました。



市内の各施設では、犠牲になられた人への哀悼の祈りが捧げられていました

旧吉田家住宅主屋



旧吉田家住宅主屋の正門前広場では、気仙町の子どもたちや来館者が作った紙灯ろうやキャンドルホルダーが点灯されました。会場には地域住民が集まり、温かな光に包まれながら交流を深めていました。



祈念公園を彩ったのは、地域の子どもたちや様々な世代の方々が作った紙袋ランタン。そこに込められた「感謝」や「復興」への想いは、人々のつながりを深め、未来を優しく照らしていました。



高田松原津波復興祈念公園

川原川公園



川原川公園では、「つむぎイルミネーション2026」が行われました。本活動は、前身の「高田に輝の花を咲かせよう」から数えて、通算13回目。会場では、イルミネーションに加え、ゴスペルの献歌やトランペットの演奏などが披露され、大人から子どもまで多くの人が集まり、心温まる空間となりました。